

真摯なキリスト者教育者、反戦運動家

一元「女子学院」院長、大島孝一さん

吉川 勇一

故大島孝一さん



■大島さんは、1919年熊本市生まれ。東北大学物理学科を卒業し、福岡管区気象台に勤務の後、41年に応召し、45年の8月6日、市ヶ谷台の陸軍総軍司令部で「新型

■本会の会員であり、東京の「女子学院」の元院長で、わだつみ会など各反戦運動、あるいは靖国問題・天皇制問題などで活躍されていたクリスチヤンの大島孝一さんは、8月27日に95歳で亡くなりました（左は2002年9月の写真です）。大島さんの訃報は『東京新聞』や共同通信配信のあるローカル紙などにはかなり出ていたのですが、なぜか全国紙に出なかつたため、大島さんをよくご存知な方でも、逝去を知らなかつた方がかなりいらっしゃいました。葬儀は8月30日、日基督教団西千葉教会で行なわれました。

そのことがひとつの中学生から「強制された自由化反対」というプラカードを掲げて院長室に押しかけられると、皮肉な波紋もあつたようです。しかし、大島さんの姿勢は、生徒をはじめ、多くの人びとから敬愛の念を抱かれました。大島さんの活動は、学園の内部に限られず、日本キリスト教団内で戦争協力への反省・方針転換への努力、靖国問題・天皇制問題などのキリスト教界内での思想的リード、市民運動の統一行動にも積極的に参加され、戸村一作さん亡きあと、つい最近まで三里塚教会に所属して説教をされていたそうです。

■戦後、東北大学、岩手大学などで教職についたあと、66年にミッションスクールの女子学院の院長になり、以後14年間、それを続けられます。女子学院の院長は、この学校の卒業生が関係深い女性のみだったのですが、大島さんは初めて外部から就任したことになります。66年からといえば、ベトナム戦争、環境問題、あるいは全共闘問題など、狂瀾怒濤の時期を含む時期です。この学校でも69年11月には、高校2年生が机や椅子を積み上げ、いわゆるバリケード封鎖が始まります。大島さんは生徒たちの要求を入れて授業を中止し、高校生・教師の全校討論集会を行ない、生徒の提起した問題を真摯に語り合います。授業は3日後に再開されます。生徒の処分などは出されませんでした。

■大島さんはさまざまな学校制度の改革を行ないます。例えば、72年にはそれまであった制服の服装規定を廃止します。「服装は個性をもつて自分で選び取るものであり、機能に応じた用い方を工夫すべきであつて、……

■著書には、1982年刊の『自己確認の旅』（新教出版社）、1985年刊の『戦争のなかの青年』（岩波書店）など。（よしかわ・ゆういち／本会共同代表）

島を見て衝撃

焼野が原の広

爆弾』の情報を受けます。大島さんの一生の反核の意識はここから始まります。

そのことがひとつの中学生から「強制された自由化反対」というプラカードを掲げて院長室に押しかけられると、皮肉な波紋もあつたようです。しかし、大島さんの姿勢は、生徒をはじめ、多くの人びとから敬愛の念を抱かれました。大島さんの活動は、学園の内部に限られず、日本キリスト教団内で戦争協力への反省・方針転換への努力、靖国問題・天皇制問題などのキリスト教界内での思想的リード、市民運動の統一行動にも積極的に参加され、戸村一作さん亡きあと、つい最近まで三里塚教会に所属して説教をされていたそうです。

■ベトナム戦争については、65年、「ベトナムに平和を求めるキリスト教の緊急会議」（通称「ベト緊」）を発足、ベトナムの反戦市民活動を続けられました。また、前田俊彦さんや私たちが「内ゲバ」抗議・阻止のアピールをはじめたときも積極的に参加されました。